

専修大学
創立130年
記念企画
第08回

日本を変える、
世界を動かす！
**社会知性の
チカラ**

The Potentiality for "Socio-Intelligence"

創造が織り成す文化とモノづくりの叡智
ニッポンの底力を支える
現場の創意と工夫

変貌する時代のニーズに応えるべく、優れた技術や製品を開発。
新たな作品を世に送り出し、あるいは変わらぬ伝統や文化を守り続ける。
創造し続ける専修大学の卒業生10人の叡智。

成功の反対は失敗ではなく
「なにもしないこと」です

学生時代は、ありとあらゆるバイトに追われていました。ですから、試験が近づくと連日徹夜で勉強したのを覚えています。私は、管理会計の奥村輝夫教授のゼミ第一期生なのですが、奥村先生は、私のようなバイトに明け暮れていた不まじめな学生に対して、とても温かく接してくださいましたね（笑）。

社会人となった一九八一年、入社した日本ゴム（現・アサヒコーポレーション）はライセン

スブランド中心の靴メーカーでした。ナイキの日本での独占販売権と委託生産を請け負い、世界一のブランドへ成長する過程を間近で体験できたことは、と

てもプラスになったと思います。しかし九八年、当社は倒産の憂き目に遭います。創業者一族による放漫経営が原因でした。

社長就任時の公約どおり
「三年以内に結果を出す」

会社更生法の適用を受け、再建の道を歩むことになります。まず、従来のライセンスブランドを中心とした商品ラインナップから自社ブランド強化という路線転換を行いました。「靴を通じて日本の健康づくりに貢献する」ことを企業理念に掲げ、新ブランドの「快步主義」を立ち上げました。この商品は、「水に浮くほど軽く、脱ぎ

履きがラクで、つまずきにくい」ことが特長の高齢者や介護用のシューズ。すでに累計三八〇万足超を販売するヒット商品となりました。ほかに、ひざのトラブルを予防し、筋肉を強化する「アサヒメディカルウォーク」、抗菌・防カビ効果のある「コーキンマスター」など、

産・学・医の共同開発により、靴の健康・快適分野においてオンリーワンのブランドを世に送り出してきたのです。リーマンショックに端を発した「二〇〇年に一度」といわれ

る世界不況のなか、いまだ更生会社として、赤字経営は絶対許されない厳しい状況にあります。それでも、〇八年度は、売上高二四〇億円、経常利益は五億九三〇〇万円、先の三ブランドは

いずれも売り上げ増となりました。「更生計画の早期終結を実現するために三年以内に必ず結果を出す」という社長就任当初の目標は、必達します。在学生の皆さんは、これから就職など大変な時期が続きますが、明確な目標を持ち、頑張っ

てほしいですね。成功の反対は失敗ではありません。『なにもしないこと』なのです。失敗すること自体、決して恥ずかしいことでは

ありません。果敢にチャレンジし、失敗を恐れず、何事にも挑戦してください。

アサヒコーポレーション
代表取締役社長
坂本健児

（1981年商学部卒業）
佐賀県出身。専大の奥村輝夫ゼミ第1期生。81年に日本ゴム（現・アサヒコーポレーション）入社。輸出部に配属される。海外調達部長などを経るも、同社は98年4月に倒産。会社更生法の適用を受け、再建に臨むなか、08年3月より代表取締役社長に就任。代表的なブランド「快步主義」は累計388万足を販売。



学生時代の奔放な
生き様と人との縁が
今の自分の原点

刀身彫刻師
橋本琇巴（1972年経済学部卒業）
東京都出身。82年刀身彫刻の第一人者、苔口仙琇氏に師事。87年、新作名刀展・刀身彫刻の部で優秀賞を受賞。その後も創作活動とともに国内外の実演会なども積極的に展開。埼玉県銃砲刀剣類登録審査員も務める。



卒業後、刀身彫刻の世界に導いてくれたのもある刀剣研究家の方です。その

学

生時代は奔放に生きました。もともと芸術の世界が好きだったので、絵画や彫刻の先生に会ったり、よその美術学校の授業をこっそり受講したり。撮影所やアンテラ劇団の裏方などもやりました。とにかく興味のあることにはなんにでも首を突っ込む。そこで、新たな人とのつながりができる。その人との縁が、私の人生の原型をつくってくれたのだと思います。

方に紹介されたのが、刀身彫刻の大家、苔口仙琇師でした。内弟子になってから五年目の師の許しを得て初めて刀剣を彫ったときは、まさに身の震える思い。そのときすでに大学を卒業して一五年がたっていました。不思議なものです。学生時代は自分の将来など否として見えなかったのに、いつのまにか、指で数えるほどしかない刀身彫刻師を生業としているのです。人生、案するなかれ。青春の真ただ中で、「これだ」と思ったときは、まっしぐらに突き進めばいいのです。

伝統と革新が
融合する文化、
そして技術
—専大で見つけた
人生の道しるべ



書家
林昇一（竹聲）
（1957年商経学部卒業）
埼玉県出身。卒業後、吉田ブラ工業に就職。61年、全国勤労美術展で労働大臣賞受賞。現在は、毎日書道会理事、全日本書道連盟監事などを兼任、国内外の書道の啓蒙・発展に尽力する。

専大の自由な雰囲気、私の個性を育ててくれました。同時に自覚の意義も学び、在学中は休むことなく大学に通いました。卒業後は、子どもの頃から続けてきた「書道」が私の人生となり、現在は作品制作、会の運営に当たっています。まさに「継続は力なり」と感じています。

ソフトブレン 代表取締役社長
秋山真咲
（1989年経済学部卒業）
京都府出身。丸万証券、日本電気情報サービスを経て、03年、ソフトブレンへ。ホワイトカラーの生産性向上のためのコンサルティングや開発業務などに携わり、08年より現職。

専大で学んだ「質実剛健・誠実力行」の精神は、今も心がけています。顧客の立場に立って、求められるサービスを提供し、役務に見合った対価を頂戴する。こうした私の仕事観も、学生時代に育まれたものです。今後も初心を忘れることなく、職務に励みたいと思います。

フリーカメラマン
釘宮慎治
（1987年法学部卒業）
埼玉県出身。05年「輝しぐれ」（黒土三男監督）で撮影監督デビュー。同作で第29回日本アカデミー賞優秀撮影賞を受賞。最新作「ばかもの」（金子修介監督）が来年公開予定。

よく神田キャンパス近くの古書店街巡りをしていました。同級生が就職活動をしている時期にも、本を読んでいるような学生でした。多くの本を読み、映画を観て、いろいろなことを考えました。大学時代に培った人生観・価値観がそのまま今の人生につながっています。

社会人になっても
常に学ぶ姿勢を
持ち続ける

シャボン玉石けん 代表取締役社長
森田隼人（2000年経営学部卒業）
福岡県出身。無添加石けんメーカーのバイオニアであるシャボン玉石けんに入社。父・光徳氏（故人）の後を継ぎ、07年に同社社長に就任。無添加石けんをベースとした消火剤は、国内外からも注目を集めている。



専

大のときに使っていた教科書は、いまだに持っているんですよ。特に『経営戦略論』は、たまに読み返していて、それが経営のヒントになることでもありますね。私が自らに課しているのは、まず、先代が苦労して築き上げた無添加石けんメーカーとしての誇りと地位、理念を守ること。そして、新たな取り組みに挑戦することです。当社の無添加石けんをベースに開発した消火剤「ミラクルフォーム」もその一つ。従来からある欧米の消火剤には、合成界面活性剤が入って

おり、環境に大きな負荷を与えると問題視されていました。その点、無添加石けんを使った「ミラクルフォーム」は、環境・技術面において世界から注目を集めているのです。現在、地元大学と連携して森林火災に使用できる消火剤の研究・開発に取り組んでいます。大学というのは企業とは異なる視点や観点を持ち、私自身とても刺激になっていますね。学ぶ姿勢は、社会人にも必要なスキルです。在学中にその基礎をつくっておくと、社会に出てから必ず役立ちますよ。

歯科医師
堀真実
（1985年商学部卒業）
東京都出身。専大卒業後、鶴見大学歯学部で学ぶ。95年、埼玉県浦和市（現・さいたま市）に、ほり歯科医院を開業。現在に至る。08年より日本大学歯学部講師も務める。

ゴルフ部での活動に明け暮れた4年間、勉強はほとんどしなかったですね（笑）。でも、ゴルフを通じて多くのことを学びました。4年生で女子部の主将を務めたのは、貴重な経験です。卒業後は、一般企業への就職も考えていたのですが、心機一転、歯科医の道へ進みました。

声優
井上奈々子
（2006年文学部卒業）
東京都出身。大学4年時にアニメ「はっぴいセブン」の中学生役でアフレコデビュー。06年に放送された『ゼロの使い魔』シリーズで人気を博す。大学在学中には高校の教員免許を取得。

母校の専大附属高校での教育実習が特に思い出に残っています。実際に生徒を受け持ったことで、ほかでは得られない貴重な経験ができました。そのときに学んだ「自分を客観的に見る目」と「人前に立つ度胸」は、声優の仕事をするうえでも、とても役立っています。

画家
藪野圭一
（1963年商経学部卒業）
広島県出身。高校時代に二科展に入選。大学卒業後、製菓会社ビアザの社長として洋菓子研究しながら絵を描き続ける。50歳を機に絵画に専念。ニューヨークに3年滞在、現代美術を学ぶ。

美術部の活動に熱中した4年間でした。部長を務めた4年生のときの学園祭で、校門を装飾するアーチを作ったことが、特に思い出に残っています。何日も徹夜して、いい作品ができました。学生の皆さんには、一つでいいので、全力で打ち込めるものを見つけてほしいですね。

床山（演劇結髪）
関史
（1998年文学部卒業）
千葉県出身。在学中は板坂剛子ゼミに所属。卒業後、歌舞伎界で唯一の女子専門の床山である光華床山に入社。08年には中村勘三郎主演のヨーロッパ公演に参加。全国の劇場で活躍中。

板坂ゼミで、歌舞伎など古典文学を鑑賞したり、アルバイトで劇場の場内案内をするうちに、歌舞伎の裏方の仕事に強く引かれるようになりました。床山の修業は厳しいものですが、在学中から先入観なく歌舞伎の世界になじんでいたこともあり、今も心から仕事を楽しんでいます。